

石田 正

石田さんは現在大蔵省の為替局長であるが、頭のよさにかけては国税庁の阪田さんと双璧の秀才である。強いてこの二人を比較すると分析力においては阪田さんが幾分勝り、総合力にかけては石田さんが稍々すぐれていると私には思われる。

二人とも私とは別懇の間柄であり、日頃兄慕している先輩であり、人情に篤い人柄で、自分の行き方に窮した時など、時折御訪ねしてその道話に近い言説に、私は光明を見出したり勇気をつけられたりすることが屢しばしばである。

二人とも上にもこびらず下にもおもねない独往の人で、淡々として簡素な生活に甘んじている。それかといつて卑屈にならず、それぞれに興味を通して人生を味得する境涯をもたれている。石田さんが洋学に素養をもたれていることは当然としても、仏教や支那哲学に深い造詣があることを知る人は少かるう。更には浪曲をよくし小唄がうまいのだから驚く。

ある時、石田さん御夫妻が結婚の仲人になって結んであげた夫婦の仲がどうもうまく行かない

で、トラブルが絶えない。そこでその夫が訪ねて来た折、石田さんは次のように諭されたそうである。

「夫婦というものは、謂わばあかの他人が一緒になったものであり、しかも男と女の結合である。男と女はもともと生理的構造や感情の構造を異にするは当然としても、教養、趣味、嗜好等々を異にするものである。だからこの夫婦関係というものは、元来、うまく行かないのが当り前である。放っておいてはうまく行く筈がない。そこに相互の思いやりと努力が要るわけだ。従って、君は先ず第一に夫婦関係はうまく行かぬものであるという観念をもちなさい。

第二に君は健忘症にならなければならぬ。過去のことをあれやこれや思いわずらうことなくそんなことを忘れてしまふよう努めてみなさい」

その人はその後、夫婦関係のトラブルについて、再び石田さんを訪ねてはこられないという。ある会合の席上で選挙や政治の話になったとき、偶々石田さんはこういうことをいわれた。

「どうも毎回の選挙において自分は投票所に出かけようか棄権をしようかに迷う場合が多い。それというのも、この人を選びたい、選ぶに値する人が見つからないことが最大の原因になっている。そこで何時も自分はこう思う。つまり、投票に積極と消極の二種をつくって、その中一票だけを行任せしめる。この人は何々議員に適格者がなくて、しかも反対にあの人は明らかに不適

格だと思われる人がある場合には、マイナスの票を行使する。そのプラスとマイナスを相殺した残りの票の多寡によって当落をきめるようにすれば、今日の政界浄化に何がしか役に立つように思われてならない」

私は石田さんのこの説を聞いて、大きく眼をひらかれたような感じがした。われわれが毎日聞いている人の意見、本や新聞を通じて知る見解の多くは、全く何の感動も伴わないようなものが多い。汗牛充棟の刊行物の多くに珠玉のような見解を探ることも容易の業ではない。しかし石田さんのように真摯に人生の真諦に参往している鋭才から、驚くべき思想を時偶伺うことができることは、うれしいことであり有難いことである。(昭、三〇・一〇)